

世界の縁結びの地

出雲のルーツ

「知らず、生れ死ぬる人いづかたより来りて、いづかたへか去る」。大地震、竜巻、あるいは大火山、飢饉などが相次いだ鎌倉時代(13世紀)、鴨長明が著した『方丈記』の一節です。「私たちはどこから来て、どこへ去っていくのか」。この言葉は、人間の生命についての哲学的な自問であると同時に、人類のルーツ(根源)についての問いかけにもなりえるでしょう。

奇しくも、2016年2月10日という同じ発行日の2冊の本があります。「日本人はどこから来たのか?」(海部陽介著・文藝春秋)、『古代倭王の正体―海を越えてきた覇者たちの興亡』(小林恵子著・祥伝社)。いずれも、人類そして日本人のルーツの解明に挑んだ本です。

『日本人はどこから来たのか?』

―万里を踏破し海を越えた祖先

「人類は誕生から700万年の歴史を持つ」と言われています。20万年前に、ホモ・サピエンスと呼ばれる現生人類が登場します。そして、5万年前、人類はアフリカから地球全体に広がったとされています。

本書の舞台は、5万年〜1万年前の「後期旧石器時代」です。ヨーロッパで、この時代の文化を生み出したのが、アフリカから移ってきたクロマニヨン人といわれています。「同じ時期にアジアへ広がった初期のホモ・サピエンスとはどのような人々で、彼らはどのようなルーツで日本列島まで広がり、それらの土地でどのような才覚を発揮し、どのような後期旧石器文化を生み出したか」。これが本書のテーマです。

人類学者である著者は、遺跡から見つかった人骨化石の形態学、考古学、DNAの研究など異なる分野の成果を統合し、特に「遺跡証拠の厳密な解釈」に重きを置いて、新しいアジアの遺跡地図を作り上げます。そこから浮かび上がってきたのが、人類がアフリカから日本列島に到達するまでの大

移動史の新しい学説でした。

著者が10年に及ぶ研究の末に積み上げた新説は、次のように要約できます。

4万8000年前、アフリカを出た私たちの祖先ホモ・サピエンスは、西アジアからヒマラヤ山脈を南北に隔てて、別れて拡散。ひとつは、インドから東南アジアへ進んだ「南ルート」をたどり、もうひとつは、ヒマラヤ「北ルート」へ回った集団は南シベリアに進み、北極圏にまで至ります。さらにモンゴルを経て、4万年前頃には中国、朝鮮半島など東アジアに到達。

1万年後、ヒマラヤ山脈をはさんで南北に別れたそれぞれの集団が東アジアで再会し、混じり合う―これが世界各地の遺跡年代をマッピングすることで得られたシナリオです。

そして、3万8000年前から、



日本へ対馬、沖縄、北海道の3ルートから別々に、初めて祖先が足を踏み入れたと、著者は主張します。

3ルートのうち最も早く日本に入ったのが対馬海峡を渡り九州北部へ至るルートで、「最初の日本人は、航海者だった」というのが、本書の重要なポイントです。



次に、沖縄。台湾から、全長1200kmにも及ぶ琉球列島を北上するルートです。台湾から列島最南端の与那国島に渡るには、フィリピン周辺から北上する、流速は速いところで毎秒2mに達するという黒潮を横断し、100kmをはるかに超える航海が必要だ。

次に、沖繩。台湾から、全長1200kmにも及ぶ琉球列島を北上するルートです。台湾から列島最南端の与那国島に渡るには、フィリピン周辺から北上する、流速は速いところ...

九州と本州で、縄文の系譜を継ぐ在来系の人々との大規模な混血が進んでいった。

対する視野はますます日本国内に限られるようになったのである。本書では、邪馬台国の実態を明らかにするとともに、七世紀に大陸から最後の為政者が渡来するまでの二〇〇年足らずの間、世界を舞台にした倭国の実像と興亡を明かしてゆく。

『古代倭王の正体』

―海を越えてきた覇者たちの興亡

先に紹介した『日本人はどこから来たのか?』が人類学者の著作であるのに対し、本書は文献を重視する歴史家の著作です。中国や朝鮮半島の歴史書『資治通鑑』(しじつがん)、『後漢書』、『三国志』などからふんだんに引用されています。

本書の著者紹介に「小林恵子(やすこ) 1936年生まれ:『記紀』を偏重する日本史学会と一線を画し、日本古代史をつねに国際的視野から見つめ、従来の定説を覆しつづける」とあります。この紹介文が示すように、本書にはまことに大胆な説が展開されています。帯の文言からして「過激」です。

「卑弥呼、神武、ヤマトタケル、応神、雄略、聖徳太子...:日本列島生まれは一人もいない!」

「まえがき」にはこう記されています。「列島の本来の住人は、南東アジアで紀元前の数千年間にわたって活躍した倭人の後裔であるが、紀元前数世紀から、中国の王朝の変遷や侵略により、江南(長江の南)や西アジアまで広範囲にわたる渡来者があった。...それが七世紀初頭の聖徳太子(突厥可汗達頭)とつっつかかんタルドゥ)の時代まで続く。...唐が建国すると列島は唐との攻防に終始し、半島とともに東アジアの一国となった。やがて平安時代末から日本の中で内乱が続き、日本人の世界に

小林恵子によれば、天皇家のルーツは、西アジアの遊牧民、大月氏(だいがつし)であり、姓は「休(きゅう)」。『やすみし』とは『万葉集』では天皇にかかる枕詞:「私はやすみし」とは「休氏」と書くのが妥当だと思ふ。休氏の下「し」は「大和しうるわし」というように強調の意味を持つ。したがって『やすみし大王』の意は「休氏である大王」という意味である。ないとされる天皇の本姓は「休」だったのである。

また、第一部第一章の題は「奄美大島の邪馬台国は海洋貿易大国だった」です。「日本人はどこから来たのか?」の沖繩ルーツを連想させます。

さらに、「倭王(初期天皇)と高句麗王、新羅王、百濟王たちが同一人物だったり、入れ替わったり、列島と半島を盛んに往き来したという大胆な説が繰り広げられています。

「あとがき」に、「日本オリエント学会で半世紀にわたって、三笠宮崇仁親王殿下に何かと学問上のお世話をいただきました。...常識外れの私説に対して一度も疑義のお言葉をいただいたことはありません」とあります。



国際的「縁結び」の象徴

―ベルタ・フォン・ズットナーの胸像―

『古代倭王の正体』に描かれた「紀元前から6世紀末まで、ユーラシアを貫く壮大な古代史」から浮かび上がってくる、西アジアと中央アジアと中国と朝鮮半島と日本列島を股にかけた人々の旺盛な交流と、日本海を自在に往き来する航海者たちの果敢さには感嘆させられます。

そして、日本海に流れ込む暖流・対馬海流の存在に目が向きます。『日本人はどこから来たのか?』には、対馬・沖繩・北海道の3つのルートが挙げられていますが、対馬海流を横切って北九州に至るのではなく、そのまま海流に乗って、沿岸の出雲、若狭、能登、そして新潟に着くルートが想定されます。

とりわけ、日本海に突き出た島根半島に、最初にコツンと突き当たる

ようにしてたどり着いた、大陸の先端技術を携えてきた人々も多かったのではないのでしょうか。

そこには良質の砂鉄があり、燃料となる森林資源も豊富で、たたら製鉄の一大生産地となり、古代出雲王国が形成されていった。

そして、国内外の多くの人々が海路や陸路を通じて集い、交わり、さらには様々な利害を調整する「縁結びの地」として知られるようになった。これが、今日まで伝わる、旧暦10月「神在月」の、八百万の神々による「縁結び」会議の由来なのではないでしょうか。

ちなみに、出雲市は昭和34年(1959年)、布野信忠市長の時に世界連邦平和都市を宣言。また「出雲芸術アカデミー」を設立している「音楽の街」としても国内外に知られています。



ベルタ・フォン・ズットナーの胸像

松江市八雲町を流れる意宇川の畔には、水の偉人・周藤彌兵衛翁の銅像が建っています。これは、島根県の斐伊川から東、鳥取県の天神川から西の地域の出身者で編成された、陸軍の松江63連隊に多数の戦没者が出た台児荘(たいじそう)の戦いの戦場となった、中国山東省棗荘(そうそう)市の劉成啓氏に制作を依頼(デザインは島根県飯南町出身の高田勲氏に依頼)したものです。

山東省は、孔子、孟子、孫子、墨子、諸葛孔明など日本でもよく知られた人物を輩出している地域です。

人間自然科学研究所は、棗荘市で彌兵衛翁のほかに孔子・孟子像も制作。山東省東營市から贈られた孫子像、研究所が杉原弘一郎氏、寺岡多佳氏の仲介で内海弘子氏か



ら寄贈を受けた中国伝説の女仙・西王母と八仙人(日本の七福神の祖)像が、鳥取県の片山善博知事・平井伸治副知事の賛同を得て、孔子・孟子像と共に、鳥取県湯梨浜町の国内最大の中国式庭園・燕趙園(本田斉園長)に建立されています。

そして、彌兵衛翁像をきっかけに、オランダ・ハーグで作られた、女性初のノーベル平和賞受賞者ベルタ・フォン・ズットナーの胸像が出雲に渡りました。



中国式庭園・燕趙園に西王母と八仙人像と共に並ぶ孔子、孟子、孫子像



2006年3月 西王母と八仙人像建立式

ズットナーは反戦小説『武器を捨てよ』を著し、「空の野蛮化」という論文で空爆による未曾有の悲惨さを警告、1914年6月21日に亡くなっています。その1週間後の6月28日、オーストリア皇太子皇妃の皇太子夫妻が銃撃されるサラエボ事件が起き、これをきっかけに第1次世界大戦が勃発したという経緯があります。



タイ国のピシェット プットルン氏・ナルモン プットルン氏から贈られた八仙人図 (174 cm x 103 cm)

2014年12月、オーストリア・ウィーンで「核兵器の人道的影響に関する国際会議」が開催されました。その中心的役割を担ったのがオーストリア軍縮大使のアレクサンダー・クメント氏です。クメント氏はこれに先立つ8月6日、広島を訪ね、2015年4月、国連本部で開かれたNPT(核拡散防止条約)再検討会議では、「国際法によって核兵器を持つことを禁止し、廃絶するために」という世界を力合わせるべきだ」という前例のない提案をしています。このような流れを背景に、4月10日、被爆地・広島で「2016年G7外相会合」が開催されます。

〈後記〉

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。

(交易場 修)